1920年代のメキシコにおけるフェミニズム運動

── メキシコ革命と婦人参政権運動のはざまで ──

松　久　玲　子

1910年に開始されたメキシコ革命の動乱が沈静化したメキシコでは，フェミニズム運動が欧米の影響を受けつつも社会的，政治的状況に規定されながら発展をとげていった。メキシコのフェミニズム運動は，中産階級の女性の関心から出発したが，次第に労働者階級の女性たちの抱える問題に取り組み，女性労働者を組織し女性解放のための戦略を発展させた。そして，政治的，社会的立場による対立を抱えながら，フェミニズム運動は1930年代後半に婦人参政権運動へと収斂していった。

教育による女性の啓蒙を掲げた19世紀末の女性運動は，欧米の啓蒙思想を受容しつつ発展して来たが，アメリカ合州国のラテンアメリカへの政治，経済的影響力が強まるとともに，フェミニズム運動もその影響を強く受けた。産児調整や自由恋愛の思想がユカタン半島の女性たちに影響を与え，社会主義者の女性たちを中心とした急進的フェミニズム運動の主張がなされた。一方，急速な国民教育の普及にともなう女性教員の急増は，首都圏や都市に女性教員を中心とするリベラル・フェミニズム勢力を形成する基盤となった。1910年にアメリカ合州国の主導で汎アメリカ大陸同盟が設立され，以後ほぼ定期的に米州諸国会議が開催された。その下部組織として汎アメリカ大陸同盟女性会議が結成され，メキシコからは教育省が中心となって女性代表を送りだし，メキシコ支部も作られた。また，この時期にメキシコではロシア革命の影響を受け，共産党が設立されたり，トロツキーの亡命を受け入れるな

ど，世界の動きがフェミニズム運動にも少なからぬ影響を与えた。こうした政治，社会的変化とともに，フェミニズム運動も次第に労働者階級の女性たちを巻き込み，さまざまな社会層の女性たちの要求を背景とした主張を展開し始めた。20年代は，中産階級から次第に労働者階級へとフェミニズム運動が拡大し，その主張や要求が多様化するなかで，女性の基本的権利として，民法，刑法，労働法などにおける男性との法的平等の獲得が運動の基軸となっていった。そして，法的平等を獲得するためには立法を男性にまかせるのではなく，女性自身の手による法的整備が必要であるという認識が，フェミニズム運動を婦人参政権獲得運動へと収斂させていった。

本稿では，メキシコ革命の動乱期を越えた1920年代から参政権運動が活発化する前の1930年代前半のフェミニズム運動に焦点を当て，婦人参政権運動へ収斂する直前の政治的，階層的背景により多様化したフェミニズム運動の形成過程を明らかにする。

まず，1920年代のメキシコのフェミニズム運動において先駆的な役割を果たしたユカタン州で，どのような活動が展開されたのかを検討する。ユカタン州の政治，社会的状況の中で生まれた社会主義的フェミニズム運動がどのような経緯をたどったのかを明らかにしたい。次に，ユカタンの急進的フェミニズム運動に対する首都圏のフェミニストたちの反応を，メキシコ市で開催された汎アメリカ大陸女性会議の論議に焦点をあてて考察する。そして，20年代のフェミニズム運動の主流となった首都圏のフェミニストの活動とその要求を，当時のフェミニズム雑誌『女性』（*Mujer*）を手がかりに考察する。1920年代には，フェミニズム運動の発展とともにその担い手たちの主張も次第に多様化する。当時の公教育省の下で革命期の教育運動を担った女性教員や，共産党員として女性労働者の権利と地位の向上を目指す女性たち，また，汎アメリカ大陸女性同盟の運動方針に沿って活動する女性たちなど，フェミニズム運動の担い手たちの関心の相違を明らかにする。

最後に，初めてメキシコ女性のみで開催された3つの女性労働者会議の諸要求を通じ，当時の首都圏の中産階級のフェミニズム運動と対立する農民，

女工などの労働者階級を基盤とするマルクス主義フェミニズム運動の形成を見てみたい。

(1) フェミニズムの先駆地ユカタン

19世紀末から20世紀はじめのユカタンは，エネケン[1]輸出の最盛期を迎え，メキシコの中でも非常に豊かな地域だった。エネケン輸出などで，ハバナ，ニューオリンズ，ヨーロッパ諸港との間に定期航路も就航するプログレッソ港からわずか22キロの所にあるユカタン州の州都メリダは，内陸に位置する他のメキシコの諸都市よりも外国の文化的影響をより多く受けていた。しかし，その繁栄は，ごく一部のエネケン農園の地主層を中心とした寡頭勢力によるエネケン産業の独占[2]と大多数の貧しいペオンと呼ばれる奴隷的農業労働者の搾取に特徴づけられていた。

カランサ大統領は，この輸出経済の中心地であるユカタン半島を掌握するため，アルバラドを知事に任命した。アルバラドは，数々の変革を行う中で1916年にフェミニスト会議を開催した。その参加者の大部分は女性教師で，女性の専門職や知識人を代表し，メキシコ革命の支持者としてアルバラドの反教権的世俗教育政策を支援した。当時，単一作物に特化したユカタンの輸出農業は工業化に結びつかず，女性に多くの雇用をもたらさなかった。そうした中で，女性に残された仕事は，事務職などわずかな職種で，小学校教員もそのひとつだった。小学校教員は男性が望まないほど給料が安く（1日2ペソ以下），そのために女性が多かったと言われている。都市の教員の多くはユカタンのフェミニズムの草分けであるリタ・セティーナ＝グティエレスが設立した女子文芸学校（Insutituto Literario para Niñas）で教員養成教育を受け，小学校教師として教職に携わっていた。一方，農村で働く女性の大部分は，大土地所有農場のペオンとして働く夫とともに農繁期に家族単位での労働に従事したり，農場主の家事労働や家内作業に使用されていた。結婚もまた，債務によって縛られ農場主に管理されていた[3]。

アルバラドの後継者であるフェリペ・カリージョ＝プエルトは，1916年に

出生地モトゥルで地主に対する抵抗運動を組織し，1918年にはアルバラドが設立したユカタン社会党の委員長となった。7万人の労働者の支持を得て下院議員となり，1922年から24年までユカタン州知事を務めた。アルバラドの世俗教育や教会勢力を縮小するための反教権主義を踏襲するとともに，当時としては急進的な女性解放のための諸政策を展開していった。

彼の妹であるエルビア・カリージョ＝プエルト（Elvia Carrillo Puerto）は，アシエンダ内の農村教師として働きながらマデーロ派としてメキシコ革命に参加し，1912年にははじめての農民女性のための組織「農婦フェミニスト同盟」（Liga Feminista de Mujeres Campesinas）をモトゥルで設立した。運動の中で，8時間労働，インディオの解放，州内の村やアシエンダに農村学校を設立し「合理主義[4]」教育を導入すること，アルコール中毒撲滅，女性への近代的避妊法の教育，自由恋愛などが論議された。また，エルビアは，アルバラド州知事時代に南東部社会党傘下のフェリペ・カリージョ＝プエルトの支持母体である中央抵抗同盟の女性組織「社会主義フェミニスト抵抗同盟」を設立した。1918年から19年にかけて，多数の農村やアシエンダを廻り，「社会主義フェミニスト抵抗同盟」に農民女性を組織した。こうした活動にもかかわらず，エルビアの名は第一回フェミニスト会議の参加者の中に記されていない。師範学校の卒業資格をもつ都市の小学校教師と農村教師の間には，意識的にも環境的にも大きな隔たりがあった。会議の参加資格は初等教育修了だったが，「農婦フェミニスト同盟」に参加するマヤ女性のほとんどは読み書きを知らなかった。

第一回フェミニスト会議では，エルミラ・ガリンドの女性の性的欲求に言及した演説が物議を醸したが，ガリンドの主張を支持したのは南東部社会党に属する急進的な人々だった。同年の11月に開催された第二回会議には，メリダの全ての女性教師が参加することが義務付けられたにもかかわらず，参加したのは3分の1の234人にしかすぎなかった。参加者の大部分は，南東部社会党に属する社会主義フェミニストたちだった。この会議で市町村レベルでの女性の選挙参加が決議されたが，公職の被選挙権は60対30で否決され

た。当時のフェミニストの中でも，参政権に対して関心がそれほど高くはなかったことを示している。

南東部社会党の勢力が拡大するにつれ，カランサ大統領はユカタン自由党の候補者を立て州政府の政権獲得を目指し，南東部社会党に弾圧を加えた。カリージョ＝プエルト兄妹は，この時期，兄はニューオリンズに，妹はメキシコ市に避難した。エルビアは，1919年にメキシコ市で「リタ・セティーナ＝グティエレス・フェミニスト同盟」(Liga Feminista Rita Cetina Gutiérez) を組織し，教育者でありフェミニストであるエレナ・トーレスに協力して「メキシコフェミニズム審議会」(Consejo Feminista Mexicano) の設立に貢献した。フェリペ・カリージョ＝プエルトは，カランサ大統領が暗殺されるとユカタン州に戻り，1920年には連邦議員となって1921年の知事選挙で圧勝した。エルビアは，1921年にメリダに戻るまで，メキシコ市に残り5万5千人の女性労働者を組織し，同時にユカタン州全土に支部を作り自らもメリダの会長となった[5]。

1922年2月に知事に就任したフェリペ・カリージョ＝プエルトは，就任演説をマヤ語で行い，次々と改革を断行した。教育に関しては，南東部国立大学，歴史考古学博物館，職業技術学校を設立し，農村学校を僻地にも普及させた。また，労働者保護のための賃貸借法，家族法を施行し，1923年12月には未使用のエネケン・アシエンダ接収法を公布し，地主層の決定的な反感をかった。東南部社会党傘下の中央抵抗同盟の支部として，エルビア率いる「社主義フェミニスト抵抗同盟」は，フェリペ・カリージョ＝プエルトの改革を支援したが，特に教育問題に力を注いだ。夜間学校の設立による識字教育，農村学校における世俗教育の確立，女性に対する近代的衛生教育と避妊方法の導入，アルコール中毒撲滅運動を展開した。また，農婦の手芸，ウイピル[6]，ハンモックなどの手工芸品を商品化したり，協同組合を作り，子どもの栄養や健康指導を行った。「社会主義フェミニスト抵抗同盟」には，ユカタン全州で何千もの農婦が組織されたが，エルビアと「リタ・セティーナ＝グティエレス・フェミニスト同盟」の農村女性教師たちが農婦たちを組織し

指導した。また，「リタ・セティーナ＝グティエレス・フェミニスト同盟」は麻薬・アルコール・売春追放運動を行い，識字運動の一環として3カ月以内に20人以上のグループの識字化を最も多く実践した女性教師に50ペソの賞金を与え表彰するなど，フェリペ・カリージョ＝プエルトの政策を支援した。

フェリペ・カリージョ＝プエルトは，アルバラドの政策を踏襲し，女性の解放は教会支配からの解放であると考えたが，産児調整，自由恋愛，女性の政治参加などに独自性を発揮した。アルバラドは，知事時代に近代的な教育を導入しようとし，男女共学や性教育を取り入れようとした。しかし，保守派からの強い抵抗にあい，学校での性教育の提案を撤回し，小学校3年生以上の共学を放棄せざるを得なかった。カリージョ＝プエルトはこうした抵抗を意に介さず，1922年2月には，かつてアメリカ合州国で法的に配布が禁止されたマーガレット・サンガー[7]の13頁にわたる産児調整の手引きを州全土に配布した。

1914年に産児調整のための運動をアメリカ合州国で開始したサンガーは，産児調整を労働者を貧困から救う手段と考えており，女性労働者を妊娠，出産という生物学的宿命から解放し，健康と生活を守ることに最大の関心を示した[8]。エルビアは，農村教師として働いた経験から，女性の身体管理と産児調整の必要性を痛感していた。当時のユカタン州で展開された産児調整は，労働者女性の保護の立場から発したものだった。1923年には，アメリカ産児調整同盟のメリダの会員を通じサンガーを招聘しようとしたが，代わりに連盟の事務局長アン・ケネディがメキシコを訪問した。フェリペ・カリージョ＝プエルトとケネディ夫人の面談記事は，中央抵抗同盟の機関誌『大地』に掲載され，同時にサンガーの避妊方法の翻訳が載せられた。これに先立ち「リタ・セティーナ＝グティエレス・フェミニスト同盟」によって，避妊方法のパンフレットが配布され，8月に婦人科小児科診療所と売春地域の診療所の2カ所の開設が決定された。これに対し，他のフェミニストたちは，産児調整に強い反発を示した。

フェリペ・カリージョ＝プエルトが実施した自由恋愛と離婚手続きの簡略

化は，さらに大きな論議を巻き起こした。エルミラ・ガリンドに代表される急進的社会主義者にとって，自由恋愛は一組の男女の精神と肉体の結合を意味し，そこには教会も市民的契約も介入しない。1917年の家族関係法では，婚姻は配偶者の希望により相互の合意の下に解消される市民契約の概念に基づいていたが，1923年3月に発効されたにユカタン州の離婚法は，婚姻を「愛に裏付けられた自由意思による結びつきで，家庭を作る目的をもつが，二人のうちのいずれか一方の意志で解消できる」と規定した。その改正の後，フェリペ・カリージョ＝プエルトは30年連れ添った妻と離婚し，アメリカ人の作家と結婚したことが，離婚手続き改正に対する非難に追い打ちをかけた。

また，カリージョ＝プエルトは女性の政治参加を推進し，1922年にユカタン州で女性に選挙権を賦与した。同年，教員で第一回フェミニスト会議に参加したロサ・トーレス（Rosa Torres）が市会議員となり，メキシコ初の市議会議長を務めた。翌年には，社会党から州議会議員に女性候補者を出した。エルビア・カリージョ＝プエルトが5万票近くを獲得し，他にベアトリス・ペニチェ（Beatriz Peniche[9]），ラケル・ドジッブ（Raquel Dzib[10]）が当選し，計3人の女性議員が誕生した。しかし，フェリペ・カリージョ＝プエルトの殺害[11]後，3人の女性議員は議会と社会党から嫌がらせを受け，議席を去った。一方，ユカタン州における女性の政治進出は他州にも波及し，同年には，タバスコ州でエルミラ・ガリンドが，カンペチェ州でフィデリア・ブリンディス・カマチョ（Fidelia Brindis Camacho）が州議会議員となった。

ユカタン州では，アシエンダの農民女性を組織基盤とする社会主義フェミニズムが台頭し，アルバラド時代にフェミニズム会議に招集された都市の教育資格を持つ小学校教員を中心とするフェミニストたちとは別の流れを形成していった。社会主義フェミニズムは，農村教師の女性たちにより担われ，農村の女性労働者を基盤として，女性自身による身体管理と産児調整，家父長制とカトリック教会支配を脱するための自由恋愛，それらを普及するための教育を要求した。しかし，エルビア・カリージョ＝プエルト率いるユカタンの社会主義フェミニズムは，フェリペ・カリージョ＝プエルトの死とともに

にユカタン社会党から排除され，ユカタンの政治の表舞台から姿を消した。

(2) 汎アメリカ大陸同盟女性会議メキシコ大会

ユカタン州でフェミニズム大会が開催される一方で，首都メキシコ市でもフェミニズムの動きがみられた。1919年にメキシコ共産党が設立されると，その創設メンバーであるエレナ・トーレス（Elena Torres）とレフヒオ・ガルシア（Refugio García）は「メキシコフェミニズム審議会」を発足させた。この組織は，共産党の綱領に従い，女性問題を扱うための組織として設立されたが，党機関ではなく女性労働者や農民女性などの民衆セクターとの連帯を志向する社会主義的な方向付けをもつ組織として位置づけられ，機関誌として『女性』（*la Mujer*）を発行した。

1922年にアメリカ合州国のメリーランド州ボルティモアで「女性の地位向上のための汎アメリカ大陸同盟」により汎アメリカ大陸女性会議が開催され，メキシコからエレナ・トーレス，エウラリア・グスマン，ルス・ベラ，フリア・ナバらが派遣された。当時のアメリカ合州国は，1919年に婦人参政権を規定する憲法修正が上院，下院を通過し，20年に各州の批准を経て成立した。19世紀末からの婦人参政権運動は女性解放の立場が次第に変質し，婦人参政権の獲得に運動目標が絞られていった。エマ・ゴードンの自由恋愛や初期のサンガーの産児調整の主張は次第にフェミニズム運動の主流からはずれていった。アメリカ合州国のフェミニズムは，婦人参政権成立によって運動目標を失い，20年代の保守的な社会傾向の中で社会変革への志向は失われていった。アメリカ合州国の主導の下で開催された汎アメリカ大陸女性会議では，児童福祉，教育，女性労働者の問題，売春の予防策，女性の市民権，女性の政治的権利，国際的連帯，各国の著名女性がテーマとして取り上げられ論議され，北米支部の副会長にエレナ・トーレスが選出された。

1922年には，マルガリータ・ロブレス＝デメンドサ（Margarita Robles de Mendoza）により，汎アメリカ大陸女性同盟メキシコ支部が設立された。この組織は，アメリカ合州国の参政権運動にイデオロギー的な影響を受けて

婦人参政権運動を推進した。1923年5月20日から30日の10日間にわたり，メキシコ市で汎アメリカ大陸女性同盟フェミニズム会議第一回メキシコ大会が開催されたが，この会議にはメキシコの20州から代表者が送られ100名が参加した。参加者の大部分は専門職の女性たちで，国内からはメキシコで初めて博士号を取得したマティルデ・モントーヤ，コルンバ・リベラ，1905年に女性保護協会を設立したフリア・ナバ等が参加した。アメリカ合州国からは女性有権者全国同盟や平和と自由のための女性国際連盟，ＰＴＡ，YWCA，カトリック女性ロサンゼルス協会，産児調整アメリカ同盟の代表者が参加した。議長は，エレナ・トーレスが務め，アメリカ合州国のフェミニズム運動の主流となっていた市民権と労働権の平等を求める決議が採択され[12]，1920年代のフェミニズム運動の指針となった。

しかし，決議に到るまでには，フェミニスト間の意見の対立による紆余曲折があった。ユカタン州の代表だったエルビア・カリージョ＝プエルトとスサナ・ベタンクールらは，女性のセクシュアリティ，産児調整，自由恋愛，学校での性教育を会議のテーマにあげるよう要求した。しかし，議長のエレナ・トーレスは，会議を成功させるためにユカタンのフェミニストからの提案を回避し，北米代表に協調した決議採択をめざした。これに対し，エルビア・カリージョ＝プエルトを筆頭とするユカタン代表は，産児調整と「性」について討論しなければ会議をボイコットすると圧力をかけた。結果的に会期の2日間をそれらのテーマに当てたが，5月24日の全体会議で産児調整は絶対多数で否決されて産前産後の診療所の設置に，自由恋愛は結婚式の簡素化の要求に書き換えられた。性教育については，「性教育」という用語そのものの使用が排除された。大部分のフェミニストたちにとっては，売春がより深刻な社会問題であり，内縁関係や未婚の母が一般的な状況にあって，自由恋愛への関心は薄く，それが意味する本質的な問題は十分理解されなかった。また，革命による人口の減少と人口増加率がわずかに0.5％という状況で人口増加の停滞に苦しんでいた当時にあって，産児調整は時期尚早と判断された。こうした内容であったにもかかわらず，汎アメリカ大陸女性同盟第

一回メキシコ大会の決議が新聞で報道されると，女性の政治的権利，法的平等，女性労働者の保護，母性保護などの要求は急進的なものとして，世間を驚愕させた。

(3) リベラル・フェミニズムの形成

1920年代のメキシコでは，1917年憲法に沿ってさまざまな改革が実施され始めた時期である。1920年にオブレゴンが大統領に就任し，メキシコは革命動乱期から本格的に国家再建の段階に入った。オブレゴン大統領は，社会改革を通じて労働者や農民の組織的な支持を掌握していた。新憲法にのっとり，農地改革が着手されたのを始め，労働基本権の成立や社会保障的政策がとられたが，そうした基本的権利の実現をもとめて，1920年前半の不況を背景に労働争議が頻発した。その中には，女性たちが主導する生活権にかかわるストライキやデモが見られた[13]。そうした時期に，メキシコ市を中心としてフェミニズム運動を担った女性たちはどのような人々だったのだろうか。

1921年の国勢調査によれば，人口約1400万人のうち都市人口は約450万人で，ほとんどの人々は読み書きができなかった。全国の識字率は24%にすぎず，男性1,878,434人，女性1,686,333人が識字者だった。また，女性の中で小学校教師が約16000人，その他に専門職についている女性は約10,000人にすぎなかった。専門職の女性のうち中学校教師，助産婦，医師，弁護士などはわずかで，タイピスト，速記者などが大部分だった。非専門職の働く女性は50万人近くいたが，そのうち女中が207,971人，物売り49,026人，農業労働者28,568人，鉱山労働者1,503人，女工は193,453人（男性工業労働者は，439,226人）いた。女工のうち帽子，衣服工場の労働者は73,421人，お針子が70,563人，繊維工場の女工が22,961人で，大部分が被服関係の工場で働いていた[14]。

フェミニズム運動に関心を寄せた当時の女性たちに関して，1926年12月12日にマリア・リオス＝カルデナス（María Ríos Cardenas）により発行された雑誌『女性』（*Mujer*）は，いくつかの答えを提供している。『女性』は，

「女性のための女性によるメキシコ初の雑誌」と位置づけられ，副題に女性の道徳的，知的向上のためにとあるように女性の啓蒙を目的としていた[15]。1926年から1929年12月の最終号まで35号が発行され，新聞や宝くじよりも安い，一部10センタボという値段で販売された。1927年に『女性』誌上で行われた「メキシコで最も知的な女性」コンクールの投票者数から推定すると，購読者数は2,700人ぐらいだったと思われる[16]。この雑誌が刊行された3年間に取り上げられているテーマを見てみると，もっとも多いのは妻・母・主婦の役割，子ども，夫婦関係といった家庭に関するテーマである。次に国内外のフェミニズムに関する情報，そして民法改正に関する論議，社会福祉，教育に関する情報が上位を占めている[17]。誌上では，民法，刑法，労働法改正の論議が取り上げられたが，民法の男女平等により恩恵を受けるのは，当時のメキシコの大部分を占めた農村地域の貧困層の女性ではなく，都市の中産階級の女性たちだった。『女性』は，主要な読者として中産階級の女性を対象としつつ，近代国家における母親・妻役割を示唆する啓蒙的役割をになっていた。

この雑誌のもう一つの特徴として，メキシコ各州の女子教育に関する情報や保健・衛生，社会福祉など教育的情報が多いことが指摘できる。提載されている美容や服飾，家庭用品の広告に混じり，創刊された教育雑誌の広告が見られる。『女性』は，当時，メキシコのフェミニズムを担っていた中産階級の女性，教員を中心とする専門職の女性を対象としていた。特に女性教員は，メキシコ革命の推進とフェミニズムを担う中心的集団だった。

1917年憲法は，反教権主義をひとつの重要な柱とし，教育活動，政治活動，財産所有における教会の権限を大きく制限しようとした。1921年に公教育省が発足し，教育相バスコンセロスが世俗的な国民教育の普及を強力に推進した。1921年から25年に初等教育登録者は26%増加し，公立学校数は1920年から25年の間に1.4倍となった。また，教員数は1910年の21,017人から1925年には29,015人となり1.38倍に増加した[18]。公教育の拡大とともに教員の増員が急務となったが，バスコンセロスの下で初等教育を担ったのは女性教師た

ちだった。1921年には小学校で男性教員の3倍近い女性教員が働いていた。バスコンセロスは，「教職は，精神的母性の一種である」と位置づけ，農村教育では識字教育とともに衛生や生活改善のための教育がおこなわれ，母親の子どもへの影響が配慮された。当時の教育改革の中で実行された女性のための教育は，労働力の再生産のための労働者家庭の再編を意図し，女性の役割として子どもの教育，家政，衛生観念の普及を重視した。また，1920年代には，事務職，家庭科，裁縫，料理や石鹸作り，造花作り，おもちゃづくり，靴作りなど家内工業のための技術訓練学校が女性たちに開かれた。この技術教育は，女性の経済的な問題に応えるものだったが，男性と競合しないようなジェンダー役割に合致した職種に向けられた。男女の差異に基づく女性役割が強化され，家庭での女性の役割を啓蒙する保守的なリベラル・フェミニズムが教育省の主導で形成された。

当時のフェミニズム運動を牽引したマリア・リオスやマルガリータ・ロブレス＝デメンドサ，エレナ・トーレスらは，女性があるべき第一の場所は「家庭」であることを肯定し，経済的な問題を解決するために賃金労働に携わる女性たちの教育を構想した。労働者階級の家族の再編と家庭における女性の母・妻役割賞賛は，実質的に差異が平等へと連結しない表面的な法制上の平等にとどまる保守的リベラル・フェミニズムの流れへと合流していった。1922年には，日刊紙エクセルシオールが，「母の日」のキャンペーンを実施し，自己犠牲と忍耐を強いられた「一日だけの女王」を社会に認知させた。バスコンセロス指揮下の教育省にみられる女性教師と精神的母性の結合は，メキシコ社会における女性の母親役割，家庭内における自己犠牲の精神と軌を一にしていた。

1927年には，連邦区で民法改正の論議が起こり，1928年に民法改正が行われ31年に発効された。法における男女平等を要求する民法改正闘争は，1920年代のフェミニズム運動の機軸となった。当時出版されていたエミリア・エンリケス（Hemilia Henríquez）の『家庭雑誌』（*la Revisita de Hogar*）やマリア・リオスの『女性』などの女性誌も民法改正をめぐり論陣をはった。

また，1931年の労働法改正では，女性の夜間労働，女性と12歳以下のこどもの超過労働が規制され，有給の産休が認められた。1932年8月には連邦区の民法が改正され，男女は同じ法的能力をもつ（2条），遺伝的伝染病をもつ人間の結婚を制限する（98条Ⅳ），夫婦の財産の分離（98条Ⅴ）による妻の経済的独立，離婚による賠償金の支払い（143条）が承認された。

『女性』の発行者であり編集主幹だったマリア・リオスは，民法改正論議に参加する過程で，フェミニストによる全国組織を作る必要性を示唆した。全国の専門職，労働者の女性たちに呼びかけ，女性自身が直接法制定に関わる必要性を説き，同時に組合運動が女性の問題に対し十分な成果を出していないことを批判したうえで，女性の自前の組織形成の必要性を訴えた[19]。

(4) 女工・農民女性労働者会議

1920年代のメキシコは政権交代のたびに内乱が起こっていたが，政治の安定化に向けて政党政治への移行がすすめられた。そのきっかけとなったのが，1928年のオブレゴン大統領の暗殺事件である。一人の有力な政治指導者のカリスマ性に依存していた政治に代わって政党政治を確立するため，カジェス大統領は29年に国民革命党を結成した。国民革命党は，地方の領袖，州政府，公務員や労働者・農民組織などの多様な集団から構成される緩やかな連合組織だったが，その結成により連邦政府に脅威を与えていた地方の諸勢力が統合され，政権交代は国民革命党を通じて行われるようになった。

1929年に国民革命党が設立されると，国民党は幅広い層の女性たちを組織しようした。そして，国民革命党の結成宣言のなかで農民女性を生産活動に統合することが宣言された。国民革命党は党に女性を動員するためフェミニズム運動を支持し，連邦区の民法改正に際しても，国民革命党はマルガリータ・ロブレス＝デメンドサを代表とする汎アメリカ大陸女性連盟，エステル・チャパ（Esther Chapa）などの属する共産党，エルビア・カリージョ＝プエルト率いる「女性同盟」（Liga de Orientaciōn Femenina），マリア・リオスの「メキシコ女性連盟」（la Confederaciōn Femenina Mexicana）などの

さまざまな女性組織を巻き込んだ論議を進めた。この過程で婦人参政権の獲得が，女性の状況の改善に不可欠であるという認識が次第に定着した。汎アメリカ大陸同盟のメキシコ代表となっていたマルガリータ・ロブレス＝デメンドサは，1931年に『メキシコにおける女性の発展』を著し，1932年にはニューヨークから女性の参政権獲得を促すメッセージを送った[20]。さらに，そのための戦略として女性の教育の重要性を強調し，同時に，フェミニズム運動は選挙権獲得運動と同義ではなく，さらに上位の理想を達成するための戦略としての位置づけた[21]。また，エルビア・カリージョ＝プエルトも，1932年に議会に婦人参政権獲得のアピールを行った。

また，この時期には世界恐慌がメキシコ女性を直撃した。1930年の国勢調査によれば，女性賃金労働者数は1921年の国勢調査と比べかなりの減少を示している。女性人口そのものは増加しているにもかかわらず，繊維工業で働く女工数は，1921年から1930年には，22,961人から8,722人に減少している。工業全体では，女性労働者の数は1921年とくらべ1930年には約9万人減少している。また，1921年から1930年までに，中，上流階級の家庭で働く家事労働者は8000人近く減少している。働く女性の数が増加しているのは，公務員のみだった。1921年には614人だった公務員の数は1930年には10,122人になった。

経済恐慌はメキシコ女性に影を落とし，その影響を受けた女性労働者たちの声はフェミニズム運動にも影響を及ぼした。1931年から34年にかけて，3回の全国女性労働者農民会議が開催された。第一回会議は，国民革命党の主導の下に，エルビア・カリージョ＝プエルトとフロリンダ・ラソ（Florinda Lazo）の呼びかけで，1931年10月1日から5日間，メキシコ市のアルバロ・オブレゴン市民会館で開催された。第一回会議には200名近くが参加したが，大部分が専門職の女性たちで女工や農民女性は散見される程度だった。この会議では，国民革命党系のフェミニストと共産党系のフェミニストの間で方針をめぐり次第に対立が顕在化した。国民革命党系のリベラル・フェミニストは，婦人参政権と女性独自の組織を作ることを主張したのに対し，共産党

系の社会主義フェミニストたちは「女性という階級は存在しない」と主張し，女性労働者の具体的な要求を決議することを求めた。この会議では，最低賃金と8時間労働，農地の分配におけるの男女機会均等，農業学校の創設により職のない女性に耕作のための技術訓練を行うことや，産休，女性の政治的権利の授与などが決議された[20]。

第二回会議は，1933年11月25日から30日に第一回会議と同じ会場で開催された。国際女性社会主義同盟の設立，女性共同組合貸付銀行の設立，教職員組合，教育省への革命教育の呼びかけ，児童保護団体の設立，児童教育保険を親に義務づけるなどに加え，フェミニズムと女らしさの違いを明確にすること，働く女性に相応しい尊敬を獲得すること，メキシコ女性の政治的権利の獲得など12項目が提案され，農民の家の設立，物乞い追放，障害を持つ児童のための学校設立，同一労働同一賃金，女性組合，闘争・ストライキ委員会，女性の政治的権利などが決議された。第二回大会では執行部をめぐり共産党系の社会主義フェミニストと国民革命党系のリベラル・フェミニストの間で分裂があり，選挙では国民革命党に支持された「メキシコ女性同盟」のマリア・リオスが会長となった。

第三回会議は，1934年9月13日か16日にハリスコ州グアダラハラで400人の参加を得て開催された。ここでも国民革命党系と共産党系のフェミニストの対立が続いたが，結局両派で合同執行部を作る調整が行われた。ハリスコ州の女性教員の最低賃金，女工の仕事場・市場の環境整備，農民の家庭菜園や養鶏，女工・農婦の裁縫指導，参政権，市場で働く家庭のための「児童の家」の設立などが報告された。この全3回の女工・農民労働者会議において，経済恐慌を背景に労働者の支持を得て勢力を拡大した共産党系の社会主義フェミニストと，国民革命党系のリベラル・フェミニストの間で会議の主導権をめぐる対立が顕在化していった。

さらに，同年6月10日には，イベリア・イスパノアメリカ国際女性同盟（Liga Internacional de Mujeres Ibéricas e Hispanoamericanas）が知識人，専門職を召集し，売春撲滅会議を開催した。会議開催の背景には，経済恐慌

による売春の増加があった。この売春撲滅会議においても，マルクス主義フェミニストと国民革命党系のフェミニスト間に売春の原因に関する意見の対立が見られた。共産党系のフェミニストは上記の売春撲滅会議への参加を物理的に阻止され，別に，メキシコ国立大学で売春撲滅会議を開催した。メキシコ国立大学における会議では，マリア・レフヒオ＝ガルシア，エステル・チャパ，エリサ・サパタ＝ベラらに率いられた共産党系の社会主義フェミニストは，売春の主要な原因は貧困であり，資本主義が生き残る限り売春は消滅しないだろうと宣言した。そして，売春の廃止，キャバレーの廃止，貧困と無知の根絶が決議され，具体策として同一労働同一賃金，最低賃金の保証，労働者階級の食費，住居費の軽減，保育施設の設立，貧しい学齢児童のための無償教科書と学校給食，軍事費の教育への振り替えが決議された。一方，マリア・リオス率いるフェミニスト会議では，救済的社会活動よりも猥褻な本・雑誌の販売禁止，保護者の付き添いなしの未成年の映画鑑賞の制限，キャバレー，ダンスホールの閉鎖，アルコールの禁止などが決議された。

女工・農民女性労働者会議と売春撲滅会議では，共産党と国民革命党の間で女性解放路線において鋭い対立が見られた。メキシコ共産党系のフェミニストは，共産党の綱領に従い，固有の女性問題は存在せず，階級闘争において女性の問題は解決されるので階級闘争を優先することを主張した。一方，国民革命党は，女性を動員するために女性運動を支持する方向性を示した。この女性労働者の組織化の主導権をめぐる対立構造の中で，唯一の共通の合意は婦人参政権の獲得であり，フェミニズム運動は婦人参政権獲得へと収斂していく。

おわりに

1920年代は，革命における各地の武力闘争が沈静化し，革命の成果である1917年憲法に基づき新しい国家建設が開始された時期である。メキシコ各地で革命に加わった女性たちは，続いて国家建設の過程に参加しようとしたが，公的な参加は選挙権が承認されていないことによって実質的に閉ざされてい

た。

メキシコのフェミニズム運動は，まずフェミニズムの先進地ユカタン州で，革命勢力の社会改革を背景に展開された。ユカンタンでは，セクシュアリティの問題や，産児調整，自由恋愛など当時としては革新的なフェミニズムの主張が展開されたが，それらの主張は必ずしもメキシコの多くのフェミニストたちの支持は得られなかった。フェミニズム運動の主流は，むしろアメリカ合州国の影響を受け，女性の市民的権利，つまり民法，刑法，労働法や参政権における男女平等を求める方針に沿って展開された。メキシコのフェミニストたちは，世界的なフェミニズム運動の流れに関心を払い，汎アメリカ大陸女性同盟の一員として運動を展開した。この時期にフェミニズム運動を主要に支えたのは，メキシコ革命を支持する女性教員や中産階級の知識人だった。その傾向は，ユカタンの社会主義フェミニストとは一線を画し，ジェンダーによる役割分担を是認した「差異の中の平等」を逸脱しない保守的なものだった。一般にも，「母の日」が有力新聞により大々的に喧伝され，「一日だけの女王」は子どもの数と自己犠牲と忍耐により賞賛された。

1930年代前半には世界恐慌による経済の悪化を背景に，共産党系の社会主義フェミニストが次第に女性労働者を組織し，勢力を拡大した。1930年年代前半に開催された3回の女工・農民女性労働者会議においてその傾向は顕著になった。フェミニズム運動は，政治的イデオロギーの対立や政党に組み入れられながら多様化な組織が形成されていったが，その中で唯一の共通認識は女性の政治的権利の獲得，つまり女性の参政権獲得だった。1930年代にはいると，フェミニズム運動は婦人参政権獲得に活動の中心をおくことにより，婦人参政権獲得を支援する次期大統領カルデナスの大衆動員政治に次第に組み込まれていった。

注

(1) サイザルアサ。リュウゼツランの一種で葉から繊維を取るために栽培され，繊維はロープ，敷物，袋，ブラシなどに使われる。アメリカ合州国北部の刈り取り・結

束作業の機械化にともない，結束用の麻ひもの材料として最適なエネケンが広大な米国市場を背景にユカタン半島で栽培された。

(2) 1899年以降のユカタン州のエネケン輸出額は2000万ペソを越え，当時のメキシコでももっとも豊かな州だった。300から400のエネケン・プランターは外資およびディアス連邦政府と結託するモリナ家を頂点とするカスタ・ディビナ（聖なる血統）と呼ばれる20から30の家系に属していた。そうした大農園で働くペオンの数は，1880年には2万人だったのが，1910年には8万人に達した。（初谷譲次，「米国南北戦争と奴隷制の復活：メキシコ・ユカタン半島におけるエネケン産業」，天理大学アメリカス学会編，『アメリカからアメリカスへ』，創元社，2000年，p. 154-166）

(3) Penche Rivero, "Gender, Bridewealth, and Marriage: Social Reproduction of Peons on Henequen Haciendas in Yucatān, 1870-1901", Fowler-Salamini, Heather & Vaughan, Mary Kay ed., 1994.

(4) スペインのフランシスコ・フェーレ＝グアルディアが提唱した合理主義的学校は，革命期のメキシコに影響をおよぼした。1917年憲法の第3条を方向付け，ユカタン，ベラクルス，タバスコなどの州政府の教育政策に着想を与えた。合理主義教育の目的は，新しい人間を形成することで，自然と社会に関する科学的知識と合理性を教える。社会的不正義と闘うために社会的不正義の起源を知り，プロレタリアートの解放を目的とする。アルバラドが使用した「合理主義」教育は，カトリック教会の支配を脱するための世俗教育の意味あいが強い。

(5) INEHRM, 1992, p. 118.

(6) ユカタンの先住民の民族衣装で刺繍を施した袖無しの上衣。

(7) 性の自由を唱えたパイオニア的存在で，「自分の体を所有し支配できない女性は自由だとは言えない」と言明し，産児調節の知識と方法を広め続けた。また，性的満足は男性と同様，女性にも必要と信じていた。1921年にアメリカ産児調節同盟を設立し，1927年にはジュネーブで第一回世界人口会議を開催した。

(8) 1920年から40年にかけてアメリカ合州国で産児調整への理解が広がり，合法化が進むに連れ，サンガーの考え方も変化し，1920年代には「産児調整は，障害者あるいは障害者になる者の誕生を防ぐプロセスを容易にする以外の何ものでもない」と述べ，優生学的な観点からの産児調整支持の議論を展開した。

(9) 1897－1976年。メリダで生まれ，師範学校を卒業後，教職と図書館関係の仕事にたずさわった。第一回教育会議に参加し，アルバラドによって州立図書館長に任命された。1916年フェミニズム会議に参加。

(10) 1882－1949年。師範学校を卒業。教師として教育に携わり，学校長となる。教育会議とフェミニズム会議に出席。

(11) カジェス，オブレゴンに反対するデラウエルタ派の暴動により，1923年12月21日，フェリペ・カリージョ＝プエルトとその3人兄弟，その支持者の計13人がデラウエルタ派のアシエンダ所有者に捕えられ，1924年1月3日に銃殺された。エルビアは，

友人の家にかくまわれ，オブレゴンを支持する地下活動を行った。4月18日にオブレゴン軍がデラウエルタ派のリカルデス・ブロカを破り，オブレゴン派が政権に復帰したが，アシエンダ所有者に支持されたイツラルデが政権を取ると，エルビアらは冷遇された。

(12) Primer Congreso Feminista de la Liga Pan-americana de Mujeres, Conclusiones y discurso de clausura, Taller Linotipográficos, "El Modelo", Mexico, 1923.

(13) ベラクルスでは，1922年に，多くの女性が参加した借家人組合が設立され賃貸料の値上げに抗議してストライキが打たれた。また，商品不買ストライキや家事労働者の賃金引き上げ闘争が各地で起こり，警察の暴力に対して娼婦たちが抗議のために行ったデモで，参加者150人に軍隊が発砲し，男性50人，女性90人の死傷者を出した。

(14) Ana Macías, *Against All Odds,* Greenwoods press, London, 1982, p. 105.

(15) "Hago un cariño llamamiento", *Mujer,* No. 1, 12 de diciembre, 1926.

(16) Macías, 1979.

(17) 36号の内，欠落している2，3号，5号から9号の記事と詩，短編，広告を除いたテーマ別の記事の割合は家庭関係29.8%，女性の法的権利が11.6%，社会福祉9.9%，教育関係の情報9.0%，保健・衛生職業7.4%，労働関係5%となっている。

(18) 革命前の1910年の初等教育登録者数は848,489人，1921年には827,278人，1925年には1,043,719人，1930年には1,429,340人，1935年には1,815,843人と急速に増加している。公立学校数は，1910年には，9,810校であったのが，1920年には革命の影響で8,161校に減少し，1925年には11,621校に回復した。特に，1925年から35年にかけて農村地域の教育発展はめざましく，1925年委172,336人だった農村学校の登録者数は，1930年には439,423人，1935年には653,142人となった。Martínez Jiménez, 1996.

(19) María Ríos Cárdenas, "Necesitamos adoptar una organización más precisa", *Mujer,* No. 21, 1 de septiembre, 1928.

(20) Margarita Robles de Mendoza, *La Evolución de la Mujer Mexicana,* Imp. Galas, México, 1931, p. 33-38.

(21) Ibid. p. 97-104.

(22) María Ríos Cárdenas, *La mujer mexicana es ciudadana, Historia con fisonomnía de una novela de costumbres, Epoca 1930-40,* Impresor A. del Bosque, México, 1934.

本稿は，同志社大学学術研究費を受けて行った研究の成果である。